

## (21) 外国語第 I 教育部会 (英語)

教育部会名	外国語第 I
部会長名／作成者名	横川博一／島津厚久、保田幸子、大和知史
概 要 (2 ページ)	
<p>1. 組織・運営について</p> <p>外国語第 I 教育部会の企画運営に関しては、下記の組織を通じて行った。なお、( ) 内は主な分担業務。</p> <p>(1) 幹事会 (月 1～2 回ほか、随時開催)</p> <p>部会長：横川 博一 (全般、非常勤講師への対応)</p> <p>幹 事：島津 厚久 (部会予算、教科書)</p> <p>幹 事：保田 幸子 (時間割)</p> <p>幹 事：大和 知史 (Autonomous English、メディア関連)</p> <p>(2) 英語教育企画委員会 (国際コミュニケーションセンターに設置の委員会、原則として毎月第 2 金曜日に開催)</p> <p>(3) 英語教育部会 (原則として、毎月第 3 金曜日に開催)</p> <p>2. 実施状況について</p> <p>(1) 開講科目・カリキュラム</p> <p>Academic English としての教育的位置づけを踏まえ、下記の必修/選択科目を提供している。</p> <p>○ベーシック科目</p> <p>Academic English Literacy 1A, 1B, 2A, 2B</p> <p>Academic English Communication 1A, 1B, 2A, 2B</p> <p>さらに 1 年生後期の Academic English Literacy/Communication では、英語学修に積極的な関心をもち、英語学部試験において優秀な成績を修めた学生に対して、定員の 10%を目途として英語特別クラス (Accelerated Course in English、ACE) を開講している。その最終成果報告として、1 月末～2 月初旬に「ACE Student Conference」を開催している (今年度は 2022 年 1 月 22 日にオンラインで開催)。</p> <p>○アドバンスト科目 (1 年後期以降)</p> <p>Advanced English (海外研修)</p> <p>Advanced English Online 1, 2</p> <p>○高度教養科目外国語セミナー A, B, C, D</p> <p>(2) 今年度の工夫・改善点</p> <p>○多様な学修機会の提供の観点から、英語外部試験で一定以上の成績をおさめた学生に対して下記のいずれかの選択肢を提供することとしている。</p> <p>A 単位授与</p> <p>昨年度はコロナ禍で英語外部試験が実施できなかったため、外部試験による単位授与については、入学以前に取得しているスコアのみが対象となり、合計 5 名にとどまったが、今年度は 42 名の申請が認められました。</p> <p>B 英語特別クラス (ACE) の選抜</p> <p>昨年度はコロナ禍で英語外部試験が実施できなかったため、特別措置として、学生がこれまでに取得した英語外部試験のスコア、特筆すべき学修履歴などにより英語力を証明する形で募集を行ったが、今年度は、通常の方法で申請・選抜を行うことができ、238 名が英語特別クラスに選抜された。</p> <p>英語特別クラスでは、16 週間に亘る学びの最終成果報告の場として、学生の企画・運営により 2022 年 1 月 22 日に Student Conference (ACE 学生カンファレンス) がオンライン形式で開催された。</p>	

※参考 <https://tim792.wixsite.com/aceconference>

○より高度なアカデミックイングリッシュの運用能力の育成を目指し、2019年度から英語科目を以下の通り変更し、必修科目数は1年次の4科目(4単位)に集約することとなったが、今年度は各科目の段階性を考慮し、共通シラバスの見直しを図った。

Academic English Literacy A1, A2, B1, B2

Academic English Communication A1, A2, B1, B2

○アドバンスト科目については、2019年度より科目数として4科目に縮小となったことや時間割上、学部専門科目等と重なり、履修がかなわない場合を考慮し、従来の『Advanced English A1, A2』『Advanced English B』『Advanced English C』から、『Advanced English Online 1, 2』『Advanced English (海外研修)』に、科目名および実施形態を変更した。なお、Advanced English (海外研修)では、2019年度から国立台湾大学とのオンライン交流授業を展開し、継続実施している。

○今年度も、コロナ禍で、基本的に遠隔授業を強いられることとなったが、国際コミュニケーションセンター・システム研究部門では、神戸大学全学共通教育の外国語科目の担当教員を対象として、2021年度前期(1Q・2Q)の成績評価方法に関するアンケートを実施し、69名の方々から回答を得て、『2021年度前期・神戸大学全学共通外国語科目における成績評価方法に関するアンケート：集計・分析結果報告書』を作成した。報告書は、今後の外国語教育活動に役立てられるよう外国語教育第1・第2部会に所属する専任・非常勤の教員に配布した。

参考：[https://www.solac.kobe-u.ac.jp/wpcontent/uploads/2021/11/report\\_assessment\\_2021.pdf](https://www.solac.kobe-u.ac.jp/wpcontent/uploads/2021/11/report_assessment_2021.pdf)

### 3. 課題について

より高度な学術英語運用能力の育成を目指し、必修科目の英語は2019年度からAcademic English Literacy A1/A2、B1/B2、Academic English Communication A1/A2、B1/B2の4科目(4単位)に集約することとなった。2019年度の実施をもとに、より良い内容や形態を探ると同時に、入学時から卒業時までの英語運用力の推移をどう測定し、学生のそれぞれの就職・進路に役立つ授業等の提供が可能であるかを、大学の方針、企業のニーズ、学生のニーズ等の観点から総合的に探っていきたいと考えている。必修科目4単位および限られた教員のリソースの中でいかに効率的・効果的に学生を指導していくかも焦眉の課題となっている。

### 4. 総合所見

まず、コロナ禍ではあったものの、英語特別クラス(ACE)については昨年度の実績をもとにオンライン形式で順調に実施された。オンラインの強みを活かす形で海外の大学から講師を招聘し、本学の学生に向けて基調講演を行っていただくなどプログラムをより一層充実させ、初のオンライン開催での学生カンファレンスも成功裡に終わることができた。ACEで最終成果目標として取り組むプレゼンテーションやレポートライティングは、Academic Englishという目標の中で中心となる要素である。ACEにおける取組みの成果や知見を今後さらにAcademic English Communication、Academic English Literacy科目に可能な形で取り入れることを考えていくことが重要ではないかと考える。

さらに、Academic English Communication、Academic English Literacyを考える上では、専門課程での英語使用を想定したAcademic Englishという目標設定をいかに具体化していくかが課題となる。そのため、今後、e-Portfolioを活用した学修成果の蓄積、広義の英語運用能力を証明するパフォーマンス評価の指標及びテスト開発などを進めていく必要があると考えている。

## A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか（100字程度）

組織の教員は、応用言語学および英語教育、英文学・英語学、芸術学・政治学・社会学・心理学などを主専攻としており、教員の研究領域の広さは、「学術目的のための英語」の教育を行う本学の英語教育の理念に合致する。実施・運営においては、部会長と3名の幹事による幹事会において部会の日常業務、各種議案について原案の作成を行う。幹事会で決定された原案は、国際コミュニケーションセンター内の英語教育企画委員会での意見をふまえて原案を練り直した後、部会（原則として、毎月第3金曜に開催）に上程し、部会レベルでの決定がなされる。これにより、システマティックに運営を進められている。

根拠資料

教育部会構成員名簿

## B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか（100字程度）

クォーターごとに「学生による授業振り返り」をオンラインで実施している。この調査で得られたデータは、担当教員各々が確認することができ、学生の回答結果を確認して、コメントを送信することが求められている。さらに、年度末には、全教員が「全学共通授業科目の自己点検・評価」を作成し、それぞれが所属する部会の部会長に提出することが求められている。これらにより、教員は、個人単位で自分の授業を振り返り、改善の模索を行うことができる。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか（150字程度）

学生による「授業振り返り」の全回答データと、教員による「自己評価・点検」のデータは、幹事会においてもチェックする。とくに、授業振り返りにおける記述式回答に書かれたコメントは丁寧に分析し、問題があると判断されれば、面談を行い、必要に応じて改善の助言を行っている。なお、過去に面談した教員のクラスの「授業振り返り」評価は、面談後、向上しており、こうした助言が一定の効果を持つことを示している。

根拠資料

オンライン「学生による授業振り返り」アンケート結果、前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス（今年度の工夫）

- ③授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施しているか（100字程度）

教員向けFDとして、12月～2月頃に外国語科目担当者に向けたガイダンスを行い、本学の外国語教育の理念を共有し、新年度のカリキュラムやICT学習環境を活かした授業改善や初回授業への準備について案内を行っている。また、国際コミュニケーションセンター主催で、毎年12月に、外国語授業担当者の授業ピアレビューを組み合わせたFDを開催している。

根拠資料

ピアレビュー（授業参観）実施に関するガイドライン、ピアレビュー実施科目一覧（国際教養教育委員会資料）、外国語授業ピアレビュー実施報告書、2021年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるとともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか（100字程度）

外国語教育のアクティブラーニング環境を整備し（Active Learning ラボおよび Interactive Learning ラボ）、IOCT を有効活用した外国語教育を推進しており、大学教育推進機構では技術補佐員等2名を雇用し、教室環境整備および教員のニーズに対応している。また、英語授業の支援者となるのは TA ないし SA であるが、多くの場合、英語担当教員の TA は、同教員が大学院国際文化学術研究科で主指導教員を務める大学院生や研究科内の大学院生であるため、教員と TA 等の連絡は密で、平素のゼミ指導等の場を使って、TA 業務に対するサポートや監督も提供されている。

根拠資料

神戸大学 SA/TA 実施要領・ガイドライン、SA・TA 採用者名簿、TA ハンドブック

### C 教育課程と学習成果について

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか（100字程度）

各科目で目標として謳われている英語の確かな基礎力の養成は、本学のミッションである、「真摯・自由・協同」をモットーとして「学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献する」人材や、ビジョンに掲げられた「先端的技術の開発と社会実装の促進を通じて人類に貢献するとともに、地球的諸課題を解決するために先導的役割を担う人材」を養成する上で必須のものとなっている。また、こうした能力は、教育憲章に明示された「国際性の教育」を支える基盤となり、神戸大学全体の理念・憲章・ポリシーと密接に関連したものとなっている。

根拠資料

オンラインシラバス、2021年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか（100字程度）

各科目において共通シラバスを設定し、目標を共通化している。また、学生向けに『外国語教育ハンドブック』を作成配布し、教員・学生ともに共通理解を整える体制を作っている。

根拠資料

オンラインシラバス、2021年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか（100字程度）

全教員は、「全学共通授業科目の自己点検・評価」を作成し、個人単位で自分の授業を振り返り、改善の模索を行うことができる。

根拠資料

オンラインシラバス、全学共通授業科目の自己点検・評価

- ④単位の实质化への配慮がなされているか（100字程度）

シラバスのテンプレートに「事前・事後学修」という項目を設置し、各教員が必要事項を書き込むことで、授業外学修時間の確保を目指している。

根拠資料

オンラインシラバス、小テスト、レポート課題

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか（150

字程度)

英語の授業では、知識を伝達するレクチャー的要素と、それを定着させるトレーニング的要素の両面が必要である。そのため、国際コミュニケーションセンター主催の外国語授業担当者授業ピアレビューを組み合わせた FD 等により、教員が教授力を向上できるような仕組みを構築している。

根拠資料

オンラインシラバス、外国語授業ピアレビュー実施報告書、2021 年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字程度）

各科目において共通シラバスを設定し、外国語科目担当者ガイダンスの実施（12 月～2 月頃開催）をはじめ適宜、各項目の記載について注意を適宜促している。

根拠資料

オンラインシラバス、2021 年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

ニーズとの整合に関しては、原則として、学部（学科）別のクラス編成とし、専攻を同じくする学生集団のニーズ（興味・関心）に沿った授業展開がなされやすい体制となっている。英語教育に関わる社会的要請については、文部科学省による方針や提言を確認し、新入生用カリキュラムの科目目標と十分に整合するよう作成されている。

根拠資料

オンラインシラバス、2021 年度版神戸大学外国語教育ハンドブック

- ⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

すべての専任教員はオフィスアワーを設け、また非常勤講師も授業時間の前後や電子メールなどを活用して、学生の質問や相談に対応している。

根拠資料

オンラインシラバス

- ⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

成績評価については、「秀（S）の上限 10%ルール」の順守を全担当教員に求めており、成績教科の時期および 2021 年度は過去 2 年以内および 2022 年度からの新任教員に対しては教員ガイダンスを実施し、その旨特に周知することとした。成績評価分布（国際教養教育院）において逸脱した例があれば、部会長から注意喚起の通知を行い、そのような成績評価となった理由と今後の改善策について文書での回答を求め、改善がその後図られたかどうかのチェックを行い、全学教務委員会および国際教養教育委員会において報告している。また、各教員別、科目単位ごとに成績評価分布を英語教育部会幹事会で検討し、科目の特性に応じた評価基準の改善などを促している。

根拠資料

オンラインシラバス、試験答案、成績分布（国際教養教育委員会資料）

- ⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

学生が回答した「授業の振り返り」より、学生は授業を受けることで、内容を理解し、一定の達成の手ごたえを得ている。また、評価 FD 委員会資料による「科目区分別回答分布（授業理解）」および「科目区分別回答分布（達成度）」は、神戸大学の外国語科目に対して学生からは概ね高い評価を得ている。

根拠資料

試験答案、レポート、授業振り返りアンケート結果、評価 FD 委員会資料